

創世記 12:1-9

7月第4週の日曜日を迎えました。本日は、当教会での私の主任牧師としての最後の礼拝説教日となります。当然ながら、心の中にはさまざまな思いや感慨が去来しております。ただ、このあとの第2部でその思いを述べる時間が設けられているようですので、ご挨拶の言葉はその時に申しあげたいと思います。そこで、早速ながら、本日の聖書の内容に入ってゆきます。本日の聖書箇所は、創世記12章、アブラハムの召命の物語を選びました。創世記のなかで、いやすべての聖書の中でも、もっともよく知られた箇所のひとつであります。創世記は、本日の12章から、それまでの1章から11章で描かれる人類全体の歴史という主題からイスラエル民族の父祖である族長たちの歴史へと、その主題が転換いたします。それは、バベルの塔の建設という出来事を通して散らされた人々が、イスラエルによって再び集められてゆくプロセス、神の民の回復の始まりを意味します。アブラハムが、ノアから数えて10代目に当たることも創世記の作者は意識しています。すなわち、ちょうどアダムから10代目で正しい人ノアが起こされたように、ノアから10代目で神の民イスラエルの信仰の父アブラハムが起こされるのであります。新約聖書のヘブライ人への手紙でも紹介されるように、アブラハムはすべての信仰者の鑑、聖書が語りとする信仰者の人生を見事に歩みぬいたお手本と見られる面があります。私自身、大学を卒業して福岡の西南学院の神学部に入学するため、東京から博多行きの新幹線に乗ったときは、行く先を知らずして旅立ったアブラハムのような心境でありました。さらに、その3年後に、西南学院神学部を卒業して、福岡から神戸の教会に副牧師として着任するときも同じような思いになりました。そのように、12章に描かれるアブラハムは特定の個人としてではなく、イスラエルの民全体の象徴として描かれています。アブラハムの召命の出来事は、アブラハムの単なる個人的な体験として描かれるのではなく、すべての信仰者に当てはまる出来事として描かれています。それは、創世記3章のエデンの園でアダムとエバが禁断の木の実を食べたことが、すべての人類に当てはまる出来事として描かれているのと同じであります。

しかし、今朝のアブラハムの召命記事を読むに当たって、わたしは、聖書は決してここで「信仰者の鑑」としてのアブラハムを描こうとしていない、ということをお願いしたいのです。アブラハムは本日の召命物語のなかで、必ずしも神の言葉に従順に聞き従っているわけではないのです。少なくとも3度、アブラハムは過ちを犯しています。そのことをご一緒に読んでゆきたいと思います。

その一つ目は、12章1節の主の言葉への違反です。1節を読みましょう。「主はアブラムに言われた。あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい」ここで、主なる神がアブラハムに提示した条件、契約の中身は3つあります。第一は、それまで過ごしてきた生まれ故郷ハランという土地を離れなさいということです。なぜ主はそう言われたのか。それはヨシュア記の24章をよむと分かります。アブラハムの先祖は、父親のテラの代にいたるまで代々ずっと偶像の神々に仕えていました。アブラハムの故郷であるハランは、テラがカルデアのウルから移住した転居先ですが、依然として偶像礼拝に支配された地域だった。だから主なる神はそこから離れ、唯一の神であるヤハウェを礼拝する民となるように、アブラハムにハランから脱出するように命じたのです。第二の条件は「父の家を離れる」ということです。読み過ぎてしまいそうな言葉ですが、特別な意味があります。それは「父の家」つまり父親であるテラの血筋の者、つまり親戚のすべてとの関係を断ち切って、家族だけで旅をしなさいという事です。家長としての立場を捨てなさいということです。偶像礼拝に染まった親族との関係を一切断ち切れ、という。聖書の信仰は厳しいですね。そこまでピュアな神との関係を求めたのです。第三の条件は「私が示す地に行きなさい」ということでした。最終的な目的地を自分で決めてはならないという意味です。たとえ、自分が気に入った土地を見つけても、そこを終の住処にしてはならないと主は言われるのです。この3つのうちの2番目の条件をアブラハムは守りませんでした。5節を読んでください「アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、貯えた財産をすべて備え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った」とあります。アブラハムは、甥のロトやハランの人々と一緒に旅をしているのです。これは約束違反です。なぜそうしたのでしょうか。じつはアブラハム夫妻には子どもがいませんでした。甥のロトは父テラの弟（ハラン）の息子であり、ただ一人の身内です。アブラハムは、75歳になっていて、主なる神の約束の言葉（す

すべての国民の父となる)を信じ切れずにいた。だから、最悪の場合は甥のロトを跡継ぎにしようと考えていたのではないのでしょうか。神の言葉に100%従い、それに賭けることをせず、目に見える親族を約束の地に連れて行った。いわば「保険をかけた」のです。しかし、このあとを読むと分かりますが、ロトの周辺で起きる出来事は、ソドムとゴモラで起きた事件からも分かるように問題だらけでした。ロトはとても神の民の系譜を継ぐような器ではなかった。結果的に、アブラハムはロトと訣別することになるのです。

アブラハムが犯した二つ目の過ち、それは「祭壇を築く」という行為についてです。アブラハムがカナン¹の地に到着してのち、アブラハムは本日の箇所²で2度「祭壇を築く」ということをしています。最初は6節です。「アブラムはその地を通り、シケムの聖所モレの榿の木まで来た。」そのあと、「アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた」(7節)とあります。二度目は8節です。「アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望むところに天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ」とあります。ここで、「祭壇を築く」とは神を礼拝するという事です。時間と場所を主のために聖別し、礼拝者として自らを整えるということです。ところが、次の9節を見て下さい。「アブラムはさらに旅を続け、ネゲブ地方へ移った」とありますが、ここでは、祭壇を築くという行為をしていません。すると、どうなったか、次の10節に「その地方に飢饉があった」というのです。ある説教者は「ここで、この地方に飢饉が起こったことは、アブラムが主のために祭壇を築くことを怠ったことに対する神の懲罰、ペナルティである」と説き明かしますが、わたしはそれは深読み過ぎると思います。そうではなく単純に、アブラハムが、祭壇を築くことを忘れるほどの困難な状況の中に置かれていたためだと思います。ネゲブとはどんな場所でしょうか。ここに写真があります(右側のページです)。あたり一面、砂漠地帯であることが分かりますね。遊牧の民であるアブラハムは、このネゲブに入り、自分たちの家畜をどうやって育て、いかに死なせずにおくかで頭の中がいっぱいだったのではないのでしょうか。礼拝どころではなかったのだと思います。現代を生きる私たちも同じです。コロナウイルス感染という未知のウイルス感染症に直面して、生活するのがやっとなりで、とても礼拝どころではない!そう呟く人もおられるかもしれない。しかし、何かの困難な事態にぶつかると、礼拝を止めてしまうような信仰を主は喜ばれるのでしょうか。私は申し上げたい。わたしたちの人生において、最も悲しむべきことは、わたしたちが、人生の歩みにおいて患難や試練、病や死などの不条理を経験することではありません。厳しい見方をすれば、それは、誰にでもある事、茶飯事です。そうではない。悲しむべきは、そのような人生のもっとも困難な時に、この私の叫びを聞き、この私の苦しみの持つ意味を問うことのできるお方、「なぜなのですか」と問うことのできるお方を、わたしたちが持っていないということです。試練を通してわたしたちを鍛え、試練を通してより深く私たちを愛そうとされている方がおられる!ということを知らないこと、それこそが、私たちの人生で一番不幸なことなのです。みなさん、困難な時にも、主のために祭壇を築くことを忘れないでください。創世記12章はそのことをわたしたちに教えてくれているのです。

アブラハムが12章で犯した3つ目の過ち、それは飢饉から逃れるためにエジプトに下った時に、妻サラ³に対してとった一連の対応です。サラは美しい女性でした。そのサラに、「エジプト人があなたを見たら、私の妻だとは言わず、私の妹だと言ってくれ」「そうすれば、私は殺されずに済むだろう」と頼んだというのです。じっさい、サラはその美貌が噂になり、ファラオの宮廷に召し入れられます。ファラオの宮廷に召し入れられるとは、その後宮、ハーレムの女性の一人になるということです。その見返りとして、彼は財産や安定した地位を手に入れます。何という事でしょうか。アブラハムがここでしたことは、自分の妻をファラオの妾として売り渡し、代償を得たということです。創世記はここで、信仰の父であるアブラハムを、妻を売り渡す代わりに、自分の身の安全と財産を得た卑劣な男として描くのです。聖書はすごいですね。イスラエルの父祖、信仰の父と呼ばれる人間の弱さや恥部、それを包み隠さずに書くのです。それは、祝福の基となるようにと言われた、あの主なる神の言葉を完全に裏切る行為でした。この嘘に対して、主なる神はファラオの宮廷の人を恐ろしい病気にかからせます。けれども、悪いのはファラオの宮廷の人々ではありません。アブラハムなのです。ペナルティは、アブラハムこそが受けるべきだったのです。

事の次第が明らかになり、サラがアブラハムの妹ではなく、その正妻だったことがファラオに知れると、ファラオはアブラハムを咎め、「あなたの妻を連れてここから立ち去ってもらいたい」と命じました。良かったですね。アブラハムは殺されずに済んだのです。私は、この言葉は、神の憐れみの業以外の何ものでもないと思います。ここに至って私たちは気が付きます。創世記12章は信仰の父アブラハムの召命物語を描いているのではない、「不信仰の父アブラハム」の召命物語を描いているのだと。

しかし、考えてみれば、このアブラハムの姿はじつは私たちの姿なのです。わたしたちもまた、神の言葉ではなく目に見えるものに頼み、困難な目に遭うと主に礼拝をささげることが忘れ、窮地に陥ると、神との約束よりもわが身の安全のほうを考える、そのような弱い人間です。イスラエルの歴史はまさに、このような不信仰な人間の歴史、神に逆らい続けた民の歴史でありました。しかし、神は憐れみに満ちたお方です。主は、そのようなアブラハムをふたたび神を礼拝する者として立ち上がらせるのであります（創；13章18節）。

教会の主であるイエスキリストは、このようなイスラエルの罪、いやわたしたちすべての人間の罪を十字架によって引き受け、贖い、赦されたお方であります。イエス・キリストは、助けを求める魂の叫びを必ず聞き届けてくださいます。大泉教会の皆さまが、これから先、どんな時にも神から離れることなく、礼拝を大切にし、祈りとみ言葉によって信仰に固く立つ群れとしてあり続けることを、心から祈り願うものであります。

お祈りいたします。